

有島武郎『カインの末裔』とグラシリアノ・ハモス『ヴィダス・セカス』における文学と社会

永江ネイディ久恵

(ブラジル・サンパウロ大学哲学文学人間科学部教授)

『カインの末裔』と『ヴィダス・セカス』の創作年代

有島武郎(1878-1923)による1917年の『カインの末裔』とブラジルのグラシリアノ・ハモス(1892-1953)による1938年の『ヴィダス・セカス』の二つの作品の比較をするにあたり、それぞれの作品の創作年前後の時代背景について簡単に触れておく。

1917年はロシア革命の年であり、日本もブラジルも社会的に大きな変動の時期にあった。植民地ブラジルの奴隷解放後、移民政策を取り入れた政府は、農地改革、農民の権利向上などに無関心であった。ヨーロッパにすでにあったアナーキスト運動はブラジルに渡った移民によって伝えられ、1922年に、ブラジル国共産党¹⁾がリオデジャネイロ州ニテロイ市に設立された。そして、1935年にルイス・カルロス・プレステス²⁾をリーダーとして、1935年に коммуニストが政権をとる決起があったと歴史学者ジョアオン・クラウジオ・ピチロ(2017)はロシア革命百周年記念のときに説明している。日本でも、1910年は大逆事件を機に、森鷗外をはじめ、耽美派の文学者等が方向転換をし、明六社も解散するに至った時期である。有島武郎が加わり、武者小路実篤、志賀直哉、弟の里見淳といったエリートがメンバーとなり創刊された『白樺』が大正時代前期の主流として活躍した白樺派も1923年で終わり、大正後期にはマルクス主義の影響を受けた労働運動や社会運動が発展し、関東大震災と世界恐慌

1) Partido Comunista do Brasil. 1960年に Partido Comunista Brasileiro に改名。

2) Luis Carlos Prestes (1898-1990)。ブラジルの軍人、共産主義者の政治家で、1920年代の左翼の象徴として名を上げた。

による社会不安のなかでプロレタリア文学が生まれるに至った。このように、両国の当時の社会的背景は非常に類似していたとみなすことができるのである。

有島武郎とグラシリアノ・ハモス

佐藤弘夫の編集による『概説日本思想史』(2005: 260; 263) の第22章「都市と大衆の思想」で、有島武郎については、自然主義に対して白樺派の人道主義を揚げる武者小路実篤(1885-1976)や志賀直哉(1883-1971)と活動をともにし、北海道の農場を小作人たちに開放した、と簡単に紹介されている。中村光夫は『日本の近代小説』(岩波書店 新書(青版) 177 1954年第一刷発行/1969年第22刷)で、白樺派、および武者小路実篤と志賀直哉について豊富な情報をあたえるとともに、有島が「武者小路実篤と志賀直哉とは年長であったし、白樺創刊前に、アメリカ、ヨーロッパに滞在して、札幌大学専門学校の教授として北海道にいたので、彼らと個人的な交渉はなく、白樺同人になったのも弟生馬の手引きであったとおもわれます。」(186頁)という。そして、『カインの末裔』は名声の力作の短編であると賞賛し、「白樺派の作家のほとんど扱わなかった農民などの生活を同情と共感をもって生き生きと描き出し、ことに北海道を素材としたものは優れています。」(187頁)と述べている。

現時点でブラジルにある有島武郎のポルトガル語訳は、『O osso』(『骨』、1923年)、および『Frenesi alcohólico』(『酒狂』、1923年)である。いずれも鈴木妙訳で、1994年にサンパウロ大学日本文化研究所発刊の日本の近代短編のポルトガル語訳集『*Contos Modernos Japoneses*』に、八作品中の二作品として収められている。編集にあたった脇坂ジェニー氏の紹介によれば、有島武郎は武士の精神を継承する家で育てられ、留学中に米国の倫理に大きな衝撃を受け、クロボトキンに関心を寄せる。1910年、帰国後に1896年に入信していたプロテスタントから離脱、トルストイの影響下で個人主義を主張する学習院白樺派の同人のひとりとして文学の道を歩み始める。最も旺盛な創作時期は1917年に両親が他界した後で、家から解放された時期である。中でも、西洋の小説をもとに、1919年に『死とその前後』、1920年に『ある女』を書いてい

る。1922年に『宣言一つ』を書いたあと、北海道の土地を小作人に与える。短編集に収められている『骨』と『酒狂』は、都会の日常の倦怠感と私生活のプライバシーが無いという認識の下で、怒りと嫌厭にまみれたソリダリティー、理解と愛情を鋭く観察し、人間の心理を細かく描いている作品と解説されている（脇坂 1994、18頁）。

有島と同じように、ハモスもブラジル政府とその社会と距離をおき、組み込まれることを拒否したにもかかわらず、検挙の経験を免れなかった。ハモスの場合は日本の個人主義のような自己実現を考える必要性はみあたらないが、弱い者を思う心、政権者の立場で社会に貢献する姿勢と批判的な立場を貫いたことは確かである。

グラシリアノ・ハモスはブラジルの第二次モダニズム文学を代表する偉大な作家であり、1938年の『ヴィダス・セカス』（枯れた人生）はブラジル近代文学の傑作とされ、アメリカのウィリアムフォークナー財団賞³⁾を受賞している。北東部で早魃から逃れ、少しでも裕福な生活を求めてセルタオン⁴⁾で放浪生活をする家族のストーリーで、人間に強いられる土地の残酷さを表現しようとしている。『サン・ベルナルド』、『メモリアス・ド・カルセレ』と共に映画化され、英語にも翻訳されている。そして、アルタミル・ボトゾ（2013年）はこの時期の文学期は新しいレアリズムへと向かい、ブラジル社会を構成しているありのままの現実を詩的に創作することであったと説明する。

ブラジル北東アラゴアス州出身のハモスは15人兄弟の長男として中級階級の家庭に生まれ、早くから文学に興味を持ち始めた。リオデジャネイロで新聞社に勤めたあと、パルメイラス・ドス・インディオス（Palmeiras dos Índios）に戻り、父の店の手伝いをし、1915年に結婚し、4人の子供が生まれた後、

3) 1981年にウィリアム・カスパート・フォークナー William Cuthbert Faulkner (1897-1962)、アメリカ合衆国の小説家が1949年ノーベル文学賞受賞を機に設立した財団賞。フォークナーは1951年と1955年、に全米図書賞を受賞している。

4) Sertão という地域はセアラ（Ceará）州全体とピアウイ（Piauí）、リオグランデドノルテ（Rio Grande do Norte）、パライバ（Paraíba）、ペルナンブコ（Pernambuco）、アラゴアス（Alagoas）、セルジペ（Sergipe）とバイア（Bahia）の6州の一部にわたる広大な地域で、雨が不規則の高温地帯。雨季は12月から6月で、乾季が7月から11月であるが、2年以上雨が降らないこともある。

妻が死去した。1928年にパルメイラス・ドス・インディオスの市長に選ばれ、再婚、4人の子供をもうける。1936/7年にふたたびリオデジャネイロに移り、妻子と下宿生活を送ったあと、州立印刷・公教育局長⁵⁾に就任。1945年に共産党に入り、1951年にブラジル作家同盟⁶⁾の会長に選任され、1952年に東ヨーロッパの社会主義国家を訪れ、その経験をもとにして書かれた『ヴィアジェン』(Viagem、「旅」)は1954年、没後に出版された。カミュの『ペスト』をポルトガル語に翻訳するなど、大きな成功をおさめている。

1933年に『カエテス』(ペルナンブコ州の Cactés 市)でデビューし、1934年に、アラゴアス州のサン・ベルナルド (São Bernardo) というファゼンダ (大農場) を買い上げて大金持ちになる人物が主人公の小説『サン・ベルナルド』で名を上げた。この二作と、1935年の『アングスティア』(Angústia、「苦悩」)、最後の小説となった1938年の『ヴィダス・セカス』が主要4作品である。いずれも、今でも読み続けられ、多くの研究の対象となっている。

晩年には1945年の『インファンシア』(Infância、「少年期」)と、1953年の『メモリアス・ド・カルセレ』(Memórias do Cárcere、「牢獄」)のような自伝的作品も残している。死後1954年に出版された4巻から成る『メモリアス・ド・カルセレ』は、10年前に経験した9か月の牢獄生活についてつづられたものである。1936年頃、アラゴアス州の公務員として仕事をしていたとき、住所を尋ねる疑わしい、しつこい電話が職場にかかってくるようになったことから始まり、理由もなく逮捕されたこと、共産主義者への弾圧の事実を訴える衝撃的な作品である。州立印刷・公務教育局長を務めていた当時、 коммуニストとみなされたのであったが、証拠不足で釈放される。1945年に『ドイス・デドス』(Dois dedos、「二本の指」)、1947年に『インソニア』(Insônia、「不眠症」という二つの短編集も出版した。中でも、『サン・ベルナルド』と『ヴィダス・セカス』は受験生にとっては必須の文学作品として取り上げられている。

ハモスの作品は、このように、ブラジルの北東部を中心に、格差社会、郷土をテーマにしている。特にボトゾ (2013年) も言っているように、地域フィ

5) Diretor da Imprensa Oficial e da Instrução Pública do Estado.

6) Associação Brasileira de Escritores.

クションがメインであった。多少の時代の差はあるが、『カインの末裔』と『ヴィダス・セカス』においては、両作家とも人間の心の深層を見つめ、それを風景描写に生かしており、登場人物の心理描写から浮き彫りになる社会問題、特に資本主義下の大地主制度における、日本の農民とブラジルの漂浪する貧困者の近似性等が見られるのである。

両作品の最初と最後の部分

『カインの末裔』と『ヴィダス・セカス』は、両作品とも大地の風景と厳しい気候の中からあらわれる名もない人間描写から始まり、主人公たちの苦しみを描いている。前者では北海道の冬、後者では北東部の早魃で生活している人々の象徴として、仁右衛門とファビアノ、それから二人の家族が紹介されている。7節で構成されている『カインの末裔』では仁右衛門と妻、赤ん坊と馬が家族を成しているのに対して、13節で構成される『ヴィダス・セカス』では、ファビアノ、スィニャーヴィトリア、年上の男の子、年下の男の子、クジラという名の犬と、亡くなったオウムが家族である。

厳しい気候に耐えながら、疲れ果てて、広大な地を歩き続ける、痩せた、飢えた身体のエネルギーを消耗しないようお互いに会話も交わさない主要人物紹介の描写の違いはあっても、近似性がおおく見られる。一方は1920年代の日本の、厳しい寒さの北海道の枯れ木の草原、他方は1930年代のブラジルの厳しい早魃の北東部で水のない川の砂だけが残るセルタオン地域を舞台としているが、両作品の書き出し部分は、どのような点で近似しているかをみることにする。『カインの末裔』は、「長い影を地にひいて、痩せ馬の手綱を取りながら、彼れは黙りこくって歩いた。大きな汚い風呂敷包みと一緒に、章魚のように頭ばかり大きい赤ん坊をおぶった彼の妻は、少し跛脚をひきながら三、四間も離れてその後からとぼとぼとついて行った。北海道の冬は空まで逼っていた。蝦夷富士といわれるマッカリヌブリの麓に続く胆振の大草原を、日本海から内浦湾に吹きぬける西風が、打ち寄せる紆濤のように後から後から吹き払って行った。寒い風だ。見上げると八合目まで雪になったマッカリヌブリは少し頭を前にこごめて風に刃向いながら黙ったまま突っ立っていた。昆布岳の斜面

に小さく集った雲の塊を眼がけて日は沈みかかっていた。草原の上には一本の樹木も生えていなかった。心細いほどまっすぐな一筋道を、彼れと彼れの妻だけが、よろよろと歩く二本の立木のように動いて行った。

二人は言葉を忘れた人のようにいつまでも黙って歩いた」。(有島武郎 1990年 第35刷) で始まり、『ヴィダス・セカス』の書き出しを筆者の日本語拙訳でみると、以下のとおりである。

「赤みがかった平野に、ジュアゼイロの木々は緑の二つの染みをひろげていた。惨めな者たちは一日中歩き続けたあげく、疲れはて、飢えていた。

平常は、あまり歩かなかったが、枯れた川の砂で十分休むことが出来たので、旅は14、5キロくらいは進んだ。日陰を求めて、何時間も歩いていたのである。

カーチング地帯の枯れた裸の木々を透かして見えるずっと遠くにジュアゼイロの木々が現れた。それをめがけて、ゆっくりと体を引きずりながらいった。スィニャー・ヴィトリアは年下の子を抱え、草の籠を頭にのせ、ファビアノは陰気げに、カロアの枝でできた狩のバッグを下げ、ベルトにつないだ鎖でとめたひょうたんをつるし、鉄砲を肩に抱えていた。年上の男の子と雌犬のクジラは後を追っていった。」(ハモス 1952)

まずは、作品の舞台となる自然の大地が目につく。家族がどこからあらわれたかははっきりしないままであるが、『カインの末裔』では「北海道」、「蝦夷富士・マッカリヌプリの麓」、「胆振の大草原」、「日本海から内浦湾」、「昆布岳」と、いくつもの地名が出てくるし、『ヴィダス・セカス』では「赤みがかった平野」、「枯れた川の砂」、「カーチング地帯」と、ブラジル北東部地域の固有名詞ですらないが、主要人物の所在する場所がわかるようになっている。対照的になるのは、そこが、日本の北国の真冬の寒さとブラジルの悲惨な旱魃の日差しの厳しさだが、どちらも、極端な気候の中に生きている人々であることも一つの相似点である。両作品とも、登場人物の描写から、自分たちの体も支えられないほどの疲れと飢えに苦しみ、その動きはスローモーションで描かれているかのような、力のない放浪者と周りの環境が、何もないといっていいほどの寂しい光景から抜け出し、生きながらえるための場所を求めて歩き続け

るしかない様子がはっきりと見える。

それから、終わりの部分にも対照的な描写が見られる。『ヴィダス・セカス』の書き出しで、カジュゼイロの緑が遠くに見えたのと同じように、仁右衛門夫妻も、作品の最後で、新しい土地を求める道中に松林で葉をつけていた一本の松の木を向こうに見ている。スィニャー・ヴィトリアは、子供たちが大きな町で学校へ通える将来を夢みながら、北東部より裕福な南部へと向かっているのに対し、有島の語り手は「二人がこの村に這^{はい}入った時は一頭の馬も持っていた。一人の赤坊もいた。二人はそれらのものすら自然から奪^くい去られてしまったのだ。[…] 二人の男女は重荷の下に苦しみながら少しずつ俱知安^{くちやん}の方に動いて行った」(有島武郎 1990年 第35刷)と描き、最後に「二人の男女は蟻のように小さくその林に近づいて、やがてその中に呑み込まれてしまった。」と、果てしなく続くであろう苦しみでしめくくっているのに対して、ハモスは「丈夫で元気な人がたくさん住んでいる大きい町に。[…] 二人でどんなことをするだろう。一瞬、ためらい、足を止めた。未知で発展を遂げた土地に辿り着いたら、おそらくそこで、束縛されるであろう。セルタオンがそこに人を送り続けるであろうその地に。セルタオンはファビアノやスィニャー・ヴィトリアと二人の男の子のような、頑丈で凶暴な人を送り続けるであろう。」(181頁)というところで終わり、両作品で、カインの末裔にふさわしい人物達の末路が示唆される。

もちろん、筋道も構成も、その他の詳細は異なるので、以下は主に、近似点に焦点を当てることにしたい。

キリスト教を懸け橋に／キリスト教に関して

日本で築き上げられたキリスト教の基盤を述べる過程で、加藤周一は次のように指摘している。明治維新前から、横浜を中心にはじまったアメリカのプロテスタント宣教師の活動からあらわれた上村正久(1857-1925)をはじめとして、維新後10年ほどの間に、1871年以降、熊本洋学校や同志社(1875年創立)、札幌農学校(1876年創立)で宣教師たちが教え、学生を回心させ、布教活動が行われた。なかでも内村鑑三(1861-1930)が青年知識層に影響を及ぼした

理由のひとつとして、キリスト教が、権力批判の立場や西洋の知識や技術への窓口となり、日本人にとってキリスト教が人間的、文化的な関心であった可能性が高いことが挙げられる。キリスト教に触れ、入信したあとで、「棄教について高度に意識的であり、その正常化のために激しく努力した極めて稀な場合」として、有島をその例にあげている。さらに、加藤は、維新後の知識人の第一世代で、修身齋家治国平天下の理想がある一方で、19世紀の西洋の文化の強い「ナショナリズム」の色彩を浴びていたものの、明治日本と自己を同定する傾向の例外として、荷風と有島を上げている（加藤 1971、370頁）。

よく知られているように、ブラジルは、ポルトガルやスペイン、イタリア、ドイツをはじめとするキリスト教国家の伝統を受け継ぎ、ハモスはブラジル社会に溶け込んでいるキリスト教の伝統を『ヴィダス・セカス』に描いているだけでなく、主人公の家族はまさに『カインの末裔』でもある。カイン（Caim）は聖書創世記の兄弟、カインとアベルのエピソードに関連する。二人ともアダムとイブの息子であるが、ヤハヴェに供えた弟のアベルの農産物の方が喜ばれたことで、兄のカインは弟に嫉妬し、殺してしまう。その結果、カインは漂浪の旅を強いられる罰を被り、彼が遊牧民の始まりだといわれている。仁右衛門は遊牧民でもなければ、クリシタンでもない、さすらいの生活を強いられる農民であるのに対し、ファビアノはブラジルのセルタオンの地をさまよう遊牧民のように移動を続けるカインの末裔に値する、見捨てられた者の代表的存在であると言える。

キリスト教に関しては、すでに述べたように、当時のブラジルでも、今でもその伝統が強いが、信仰するのが当たり前で、日常に根付いていたので、登場人物の言葉に、キリスト教に関連のあるものがたくさん見られる。日本で仏教用語が日常的に使われているのと同じように、ポルトガル語の感嘆詞、感嘆表現は全部とっていいほど、キリスト教用語と関係があるか、もしくは、神や聖人の名をそのまま呼ぶ表現である。例えば、「Meu Deus!」「Jesus!」「Cruzes!」「Nossa (senhora)!」「Mãe do céu!」などがそれに値する。最初の三つはそれぞれデウス、イエス、十字架を意味し、最後の二つは聖母マリアの尊称・呼称である。

だが、祈るようなそういう言葉よりも、カインの子孫にあたる自分の子供たちを叱る時に、見捨てられた、みじめな人を罵る言葉が多く使われているのである。息子に対してファビアノは、キリスト教に関連のある罵りの言葉を発するが、その例として、子供たちに対して、「condenado do diabo（悪魔に処罰をされたもの）」、「excomungado（洗礼を無効にされた人）」、「capeta（魔物）」、そして、文句を言うときは「inferno（地獄め）」といった表現を使う。そういった罵りの言葉は『カインの末裔』にもみられ、キリスト教と関連のない白痴、白痴奴、腐孩子！糞を喰らえ、横道者（邪もの）といった表現がそれである。有島の作品はキリスト教に関するタイトルであっても、それに即した表現はみられないが、ハモスのヴィダス・セカスにはキリスト教に関連した表現がごく自然に使用されている点でも、『カインの末裔』の名にふさわしい作品といえよう。

仁右衛門とファビアノの人間像

仁右衛門は狂暴ではあるが、自分の意志、考え方を十分表現できるため、権力者である地主と農場におけるその代表者との葛藤がはっきり描かれているが、結局、たどり着いたその場所から追いだされる立場になり、放浪を続ける身としての生涯が続くのである。

それに対し、ファビアノは口下手なためにすぐに怒鳴る悪い癖があり、暴力的な態度でふるまい、権力者である Soldado Amarelo（兵士）に文句なしに従い、思考力がよわく、まわりのいいなりにならざるを得ない始末であるが、家族のためなら何にでも耐えられる強さを持っている。いつも思い出すことは、スィニャー・ヴィトリアが固い板のベッドを嫌がっていることで、皮製のベッドに憧れる妻の、その夢をかなえてあげてやりたいという優しい心をもっているし、自分が見たこともない学校に二人の息子を通わせたいと願っている。

書き出しで見られる、主人公たちの口数が少ないという共通点は、ファビアノの家族の場合、最後まで見られる現象であり、オウムがクジラという名の犬のワン・ワンという声を繰り返すことしかできないのは象徴的である。実際、会話文は極端に少なく、ある時は、短く、擬声語のような言葉、言葉がただ並

べられる程度である。そのため、風景と人物の描写に限らず、時間の流れ、登場人物の意志、志向、考え方、見聞などが、語り手を通して展開されていく。自分の意見や考え方を述べるための表現力もなければ、語彙力にも欠けていることがあらわになる。が、『カインの末裔』の主人公は狂暴でありながら、表現力を持ち、農場主と小作人の間にある権利の大きな違いなどを肌で感じ、認識しているにもかかわらず、それに対抗する力がなく、自分たちの居場所を探し続けるしかないみじめさと未練を語っているかのようである。

ハモスの小説は筋道のようなものではなく、第1節の「移動」と最後の「脱出」のほかに、ファビアノが町に仕入れに出かけたときに、あいにく一夜逮捕されるエピソードを語る「牢屋」と逮捕した兵士に注目した第11節、寒さと雨の烈しさに立ち向かう「冬」（7節）と、家族ぐるみで町の広場で開かれる一年中で幸せなひと時として一番楽しみにされるクリスマスの日の経験「祭り」（8節）は期待外れで、みじめさと苦しみが増すなど、主要人物の思い出と将来の可能性の夢を交えながら、語られている。

『ヴィダス・セカス』創作のいきさつについてゼニル・カンポス・ヘイスは、ハモスが、セルタネジョ（sertanejo、「奥地に住む人々」の意）、セルタオン出身であり、本当に貧しいセルタネジョについて書くきっかけになったのは牢獄生活の経験であると述べ、セルタネジョや農民の登場人物は『サンベルナルド』にも、『アングスティア』にも多く出てくるが、貧しいセルタネジョの家族が作品の中心をなす小説は『ヴィダス・セカス』が唯一であると断言している。（ヘイス 2012、18頁）。



図 1

左の地図はブラジル北東部の気候⁷⁾。左から二番目の一番広い部分が、Sertão セルタオンと呼ばれる地帯で、右の地図でみると、セアラ州全体・バイア、セルジペ、アラゴアスの4つの州の大部分とリオグランデノルテ、パライバ、ペルナンブコの3つの州の約半分を占める大きな地帯にあたる⁸⁾。

ハモスと有島には多くの相違点があるのは当然であるが、なかでも最も大きな違いがはっきりとみられる点は牢獄生活の経験である。囚人と共に暮らした10か月の間、特に貧しい階級の様々な人と接したことで、ハモスはファビアーノを人間味にあふれている人物として描くことができたと言えるだろう。子供たちに暴力を振るうことがあっても、二人の将来を考えると、教育を受けさせるのが解決策であるという夢のような気持ちを抱かせるように描いている。クジラは家族同様に扱われ、子供たちと同じように蹴られたり、叱られたりしたが、狂犬病になったときに救ってあげようとしたり、玉蜀黍を数珠玉の代わりにクジラの首の周りにかけたり、日夜様子をみるなど人間と変わりのない扱いを見せている。ヘイスはこの作品のキーワードは連帯意識であるといっているが(2012, 195頁)、確かに、それは人間の動物への愛情で示されているだけでなく、クジラが獲物をとったときに自分で独り占めせずに、家族全員が飢えをしのぐために共有するといった動物の人間に対する愛情でも示されている(ハ

7) https://static.todamateria.com.br/upload/su/br/subregioes_nordestinas_2.jpg 2021年10月23日アクセス。

8) <https://s1.static.brasilecola.uol.com.br/be/e/o%20estudo%20da%20regiao%20nordeste.jpg> 2021年10月23日アクセス。

モス、1952、13頁）。貧しい人間も下等動物も区別のない世界であるかのようである。

ファビアーノ一家は下等な人々であるから動物のように描かれ、オウムとクジラは動物であっても人間に引き上げられている。獣と人間の区別がつけられていない。家畜も人間も同様の生き物、そして、カインの罪を背負ったものも同様。けれども、自分が人間でありながら、クジラとかかわらない獣であることに對して、誇りを持っているし（22-24頁）、知識人として認められているトマス氏などの登場人物も早魑に苦しんでいることは、ファビアーノの目には明らかである。そこに、ハモスの教育の価値が認められる半面、そういった人たちでさえ、厳しい環境で生活できる条件が満たされていなく、ブラジル政府に対する批判がみられるのではないだろうか。ファビアーノは筋肉のある、鍛えられた強い身体を持っているが、思考力はないし、欲望も希望もなく、素直に従う者と見られるのに対し、『カインの末裔』第二節の、仁右衛門の「可愛い獣物ぞい汝は。」、第三節の「仁右衛門は吼えるように」といった言葉からは、登場人物に動物のイメージがうかがえることも見逃せない。それから、「松川の屋敷に這入って行った。農場の事務所から想像していたのとは話にならないほどちがった宏大な邸宅だった。何んという暮しの違いだ。何んという人間の違いだ。親方が人間なら俺れは人間じゃない。俺れが人間なら親方は人間じゃない。彼れはそう思った。そして唯呆れて黙って考えこんでしまった。」と仁右衛門が認識した時に、人間社会の矛盾、格差社会の酷烈で悲惨なことを訴えている。

タイトルをはじめ、言葉の選択、表現の使用の点でヘイス（2012）はハモスの優れた力量を賞賛している。確かに、タイトルのヴィダス・セカスは複数形であること、Vida Secaではなく、Vidas Secasはファビアーノの家族を含むセルタネジョ全体を象徴しているし、単数の「ヴィダ」は「人生」とも解釈できるが、「生命」と理解する場合、自然の無限の力があり、その生命が乾いているという事は大きな矛盾であり、『枯れた人生』として翻訳したタイトルのもう一つの可能性を『乾いた生命』とする時、解釈が大きく変わることである。ファビアーノと妻のスィニャーヴィトリアについては、描かれている過去と現在

の生活、二人の希望は記憶として描かれ、二人の子供の場合もその点では同じであるが、父母がいない将来のことは何もわからないように、年上の男の子と年下の男の子が名もない漂浪を続けざるを得ない兄と弟でしかなく、そのまま生き、死んでいくのであろうことも想像できる。

陳穎（2001）が『カインの末裔』における自然描写と主人公の心理の一致を見出しているように、仁右衛門は「まだか」のあだ名で知られ、優しくない環境に対抗しなければならない、獣人間の強さをファビアノと同様に表しているが、仁右衛門の方はファビアノより教育を受けている面があるが、まだ残酷なふるまいから抜け出せない。その点、申智淑（1999）による主人公の読み直しで指摘されるように、仁右衛門のそういった狂暴な振る舞い、酒と賭け事、女遊びは認められるが、村の中で起きるすべての悪いことが彼の責任であるわけではなく、「彼の後悔しているものは博奕^{ぼくち}だけだった。」（有島武郎 1990）という言葉が印象的である。「松川農場」の者でないために、部外者扱いをされる仁右衛門夫妻にも、ブラジルのセルタオンから南西部に向かう、遊牧民のファビアノ家族が見つかるであろう居場所があるかもしれないと想像したい。

ハモスが『ヴィダス・セカス』でファビアノ家族の終着点としてたどり着くであろう西南の大都市での生活を想像するときに使用している未来進行形、すなわち、未来形でありながら、推定か断定の中間くらいの意味を持つポルトガル語の動詞の活用形を生かしているという、ヘイス（2012）の鋭い解釈を見逃すことはできない。

終わりに

本稿では日本の有島武郎『カインの末裔』とブラジルのグラシリアノ・ハモスの『ヴィダス・セカス』についての近似点に迫り、日本で知られていないハモスとその作品を紹介し、それぞれの国における社会問題、貧富の差、対照的になる暑さと寒さ、農民と流浪の民の厳しい生活と特徴などを、比較しながら考えることをめざした。

作品の構成、内容の詳細において多くの相違点があることは当然ながら、舞台のイメージ、カインの末裔にふさわしい登場人物の描き方、歴史的にも文化

的にも全く違う二つの国で、資本主義が台頭し、自然な成り行きとして社会運動が始まり、高揚していく過程という特定の時期において、人間の居場所を見つめ、それに対抗する創作が両国の作家の私見の一致が見られることは驚きに値する。

もちろん、文学作品を通して、日本とブラジルをつなごうとするのは拙筆者の初めての試行であるが、今まで、両国の文学に触れながら考え続け、たどり着いた一つの研究の初歩的な成果であり、これからも進めていかなければならない課題の一つであると思われる。

参考文献

- 有島武郎『カインの末裔』1990 https://www.aozora.gr.jp/cards/000025/files/204_19524.html
2018年1月20日アクセス。
- 陳穎（Ying Chen）自然描写と人物心理の一致：有島武郎の『カインの末裔』を通して
広島大学学術情報リポジトリ Hiroshima University Institutional Repository 日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 2001, 15期：105-111 <https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038910> 2021年9月11日アクセス。
- 加藤周一『日本文学史序説』下 筑摩書房 1981年 369-370頁
グラシリアノ・ハモス『ヴィダス・セカス』（『枯れた人生』）リオデジャネイロ、ジョゼオリンビオ出版 1952年 第三刷 183頁
- 申智淑（Shin Jisuku）有島武郎「カインの末裔」小考：仁右衛門像の読み直しのための試論 1999年 18-27頁 <http://hdl.handle.net/11094/68943> Osaka University Knowledge Archive: OUKA <https://ir.library.osaka-u.ac.jp/> 2021年9月11日アクセス。
- フラゾン・デイルヴァ（FRAZÃO, Dilva）Biografia de Graciliano Ramos – Escritor brasileiro. [グラシリアノハモスの伝記——ブラジル作家] 電子伝記 ebiografia https://www.ebiografia.com/graciliano_ramos/ 2021年10月1日アクセス。 <https://s.ebiografia.com/assets/img/authors/gr/ac/graciliano-ramos-l.jpg>
- REIS, Z. C. (1993). Tempos Futuros. *Revista Do Instituto De Estudos Brasileiros*, (35), 69-92. <https://doi.org/10.11606/issn.2316-901X.v0i35p69-92> 2021年9月8日アクセス。
- ボトゾ・アルタミル Opressores e oprimidos: uma leitura do romance Vidas secas, de Graciliano Ramos. *Revista da Universidade Católica de Brasília*. Volume 6 – Números 1/2 – Ano VI – dez/2013 p. 49-66. <https://portalrevistas.ucb.br/index.php/RL/article/view/3807/3386> 2021年8月30日アクセス。
- 脇坂ジェニー（WAKIZAKA, Geny）序文 Contos Modernos Japoneses. [近代日本短編小説] サンパウロ大学日本文化研究所 1994年 11-19頁

Literature and Society in Arishima Takeo's *Kain no matsuei* (1917) and Graciliano Ramos's *Vidas Secas* (1938)

Neide Hissae NAGAE

Resumo

O presente artigo tem a finalidade de comparar as obras *Kain no Matsuei* (1917) do escritor japonês Takeo Arishima (1878–1923) e *Vidas Secas* (1938) do autor brasileiro Graciliano Ramos (1892–1953) em suas semelhanças e dessemelhanças quanto à constituição e conteúdo das mesmas. É digno de nota que dois autores originários de uma classe abastada e que habitam pontos geográficos opostos no planeta possam apresentar confluências interessantes sobre os problemas sociais ligados à desigualdade financeira. De um lado, com as personagens japonesas no rigor do inverno do extremo norte do país, e as brasileiras, no sertão nordestino da seca. Ambas as obras denunciam os problemas de uma sociedade desigual gerada pelo capitalismo e são comoventes pelo modo como fazem transparecer a humanidade desses escritores ao se rebelarem contra esse sistema e renunciarem os movimentos sociais que naturalmente haveriam de acontecer em nível mundial. Dessa forma, é possível e necessário lidar com essas duas obras bastante atuais, lançando um novo olhar sobre elas.